西遊旅譚
巻之肆

西遊旅譚巻之四

十一月十四日長崎を發して三里時津に至る十五日朝船に乗て風雨波の中を大村領亀浦といふ小島にかゝる程なく船を出して又小串といふ小島にかゝる大串島有船より出て海岸を出す皆岩石雲母なり此日大風雨なれば爰に泊て十六日巳の刻此船を出して六里を走平戸領針尾瀬戸に至る右ハ大村領左ハ平戸領なり地の辨天沖の瀬にいたる此所半里程の中山入組齟齬して潮岸岩に觸波をこして皆雲珠捲をなせり誤て乗入バ船忽沈むと又海底岩石抜出る

所ハ白波飛で沸湯のぬし潮滿て船をも干潮にハ不乗
弁天

向所ハ長崎の方なり
沖ノ弁天

平戸城下勝青山ヨリ眺タル圖

カクハラ
小川
ミマ
呼ユ
ミサキ
ムク嶋

則針尾の瀬戸を越て小鯛が浦といふ小島に至るに船をかける又夫より大鯛が浦に船を留て今朝丑の刻に東風に帆をあげ九十九島の内牛が首などいふ島々を見て走る事十七日四時あまり平戸島に着岸す此平戸城下廻船数十艘ありて鮪漁（西国にてはシビといふ 大坂にてはハツといふ）

江戸より／マグロなど を積(ツミテ)る船ありしに發(ハツ)して冬月時雨(シグレ)の風あしに帆(ホ)をあげて玄界(ゲンカイ)灘(ナダ)をわたりて下の関をのぼりて夫より防州(スハウ)灘(ナダ)をこえて阿波(アハ)の鳴門(ナルト)瀬戸ナリをのぼり志摩(シマ)の国鳥羽(トバ)ノ浦より伊豆の東海を経て七八日ありて江戸に来る也

小田原町／より売出ス 又船中滞(トドコホル)事あれば塩(シホ)に漬(ツケ)るゆへ船に数(カズ)の塩あり

鮪ハ伊豆より秋より漁するものハ三四尺のものなり／平戸より五六尺支那献京よりハ丈余甚毒なり 此ほか煖土(ダンド)よりして橙(ダイダイ)ザボン

ダイダイニ／十倍ナリ 多し雪(ユキ)霜(シモ)稀(マレ)なり赤大根(アカダイコン)赤蕪(アカカブラ)なり菜葉をみん

土瓶(ドビン)にて佳茗(ヨキチヤ)をのみ茶づけ蕪漬(カブラヅケ)なり冬月もいづれも食事(シヨクジ)四度(ヨタビ)にす

平戸城下観音院の地内鐘ハ支那より渡ると云又た
奥ニ支那物にて播州尾上の鐘と同物なり所蔵る
観音堂在り小松重盛の観音と云又阿部ノ宗任ノ塚有り
昔し和蘭及イギリスより此島に船を着しより
園の屏今ハ石を積てチヤンと混し市街の
橋石を以て作る事長崎の如し昔西洋の人作る今まま十二月廿三日冬
至る寺の開基支那僧なるか今に此日を祠るなる
俗家に於ひ鉄等掲ぐ

観音院地内鐘之図

阿蘭陀墻

聖護院御願所平戸島觀音院
奉施入鐘一口應永十二年未
十二月日と彫てあり
天人樂器を鑄せり

平戸城下より一里北の方白嶽へ行路坂をのぼり山に入
柴しげりて樹なし馬乃牧を放白嶽絶頂より大島宅
島眼下に見へ遥に壹州見ゆることも時に對馬も間〻見ゆる
二つある布太髪といふ西の遥に朝鮮国常に見ゆるより東
の方斑島　唐津乃絶地也　西の方日本の地なし支那海なり西より南壹岐
月島見えて西南に安満嶽とて平戸第一の高山なり夫より
嶽をくだり田助浦といへる港より下関の方へ渡るに船を
かける港なり　方濟日本房州に漂流せる時長崎まで送る事を記録せし一軸の図あり巻中に平戸田助の港に泊して船中より望
の図あり余模写して秘しける余の図ある所て
山より眺むる景にして図中にあるは画くものの鮪樓なり

薄香浦之圖
平戸津下ヨリ一里
是ヨリ生月島ヘ
渡ル海上三里
田助浦
唐津山

對馬
北方
東の方斑島アリ
壹州
フタカミ
無人
大島亘三里人家七百余軒
宅島人家百余軒
横島
白嶽頂

朝鮮國
生月島亘三里西南ノ方ナリ
七島アリ
ヨシカ
左ノ方安滿嶽アリ
ヤスマンダケ

十二月四日朝風なり城下より一里山を越(コヘ)薄香浦(ウスカウラ)に至り此浦より舟を出す舟人(カコノモノ)五人にして櫓(ロ)をおす風なくて晴わたりし故に須(ス)草といふ所を入(イル)此所鮪納屋(シビナヤ)一軒あり千余人家あり又鮪漁(シビリヤウ)の所なり生月嶋(イキツキ)に渡る海上三里濤(ナミ)大にして舟中に入衣服を絞(シボル)日暮(ジツボ)に生月嶋に着岸(チヤクガン)す此嶋にとゞまる事二十日也

須草（スグサ）
此所ハ城下の後田助の脇也
鮪納屋
須草よりのり出しける図

生月島之圖 亘三里アリ

狭子嶽
遠見番所
松本ノ方
鮪見樓
鮪網

五日四時過より猿子ヶ嶽頂に
のぼる路田夫乃家より石を囲て
壁となし合舎を作る廿町登りて
絶頂に至る頂に登り見る人
の曰一年両三度にわる
西乃方暮色国を
見ゆるよし即
支那の地と

狹、子嶽ニ登ル山中小童来ル図ノ如シ

此辺海中より龍の天に昇事ある龍昇んとする時ハ海波雲珠のごとく捲りて天より八黒雲降其雲波とともにうごど波高く吹上り天上すると鱏といへる魚の尾乃如きものは雲の中よりさがる即龍の尾なり故に此島の名を龍の昇といへり鱏の尾といふ漁父がのがるといふ八日此島のうちにてとれる所鮪漁を見たり鮪ハ秀月山し乃岸をもとめてきたる故に山の腰に網を布一網に二三百或四五百大漁乃時ハ千も入よし

鮪網之圖

地ノ方
本網
ホンアミ
起網
オコシアミ
百廿尋
百八十尋
百八十尋
沖之方
一尋ハ四尺ニ當ル
立櫓

鮪漁

鱐又タカマツ
氣ヲ吹
人勢

十三日此島も煤拂とて祝ふ事同し四時比鯨来るといふ
それより鯨舟にのり櫓八艇立て矢のごとく走る也風
やはらかにして波のうねりは太山のごとし鯨刺舟のおもてに
立ち四方を乗廻るにタカマツ一名潮を吹き山に映し煙の
ごとしタカマツ来るときは鯨逃去よしタカマツも則
鯨を喰ふ魚なり鯨のよりてくれば故に舟を生簀
にしなは舟中より西の方を望ば山々唐画のごとし
十六日早朝鯨見ゆる直に舟を出しけるにみえざりし
見えざりし彼方此方に鯨の脊を出し気を吹をみる

夫より舟は鯨(クジラ)の見(ミユ)る方へ追(オフ)て走(ハシル)尤平戸島(ヒラトシマ)より生月島(イキツキシマ)乃間
の海より鯨いりきたるを見しらすれば舟を生月島の方へ追
らんとする時よりやゝゆく番船は大島の沖まで一艘(イツソウ)の
船より鯨くるを見て魚鯨(モリ)をふり旗(ハタ)をあげしらせて四方の舟
鯨の方におもむかんとする十艘(サウ)ばかりなり
鯨をはさみせむる様なり巨漁(キヨギヨ/オホウヲ)の大洋海(タイヨウカイ)をも飛動(ヒドウ/ウゴク)する
とらゆるに波濤(ハトウ/なみ)山のごとしやゝ有て余(ヨ)の乗(ノリ)し舟も三崎
三崎ハ鯨を切解所にて居宅より一里ばかりの方也
よりいつ所に着(ツキ)ぬる日暮て初更(シヨカウ)も過なり
岩石(ガンセキ)を揺(フル)ふ波の音を聞此所に宿(シユク)して

鯨漁之図

鯨ハ沖ニ出し海上ニ
あらハれ気を吹漁
夫を見て魚銛を
投る気を吹終れハ尾
を出し波を打て海
底に入

鯨舟ハ二十艘を出す
其外勢子(セコ)舟いづる又
網舟を出して雙海と
名づく
一結(ヒトムスビ)と云ハ網舟二艘ニ
通舟(カヨヒ)三艘なり此舟を以
三結を出して之を結ひ皆て
六艘網舟ハ大船なり
是網を積むなり

鯨を網にて捕ことハ網ハ縄にてつくる浮木をつけて幕のごとし
海中に張置其の張る網の方へしだいにくじらをおふ
網ハ七八百間も海底に張たる網と十間二十間ほど繋置
くじら其の網に掛れバ網ハ継る所より切て鯨の
頭に冠りて鯨にげれども労む折り舟近寄して又銛
ハ鯨の背に舟を乗かけざればうつすべからず銛一鉾撲
又銛に縄をつけ舟一艘にて引又一艘の舟来て銛
をうちて二艘にて引其外来て撲ときハ舟数をまし
陸の方へ鯨をひきよするに漸し自舟を囲て鯨の引方に取り又

頭を出し潮(ウシホ)を噴しける劔(ケン)（鯨を殺(コロ)す具なり）を投(ウツ)りて数(シバ)く打かけおそく
鯨潮(ウシホ)を吹する所なれバ吾等(ト)ともに吹出す処に一人の若者(ワカモノ)海中に
飛入鯨の脊(セ)にのぼりその脊(セ)を穿(ウガチ)大綱(ツナ)を曳透(ヒキトヲス)ける鯨ハ又
波を推(タイ)し海底へ沈ミ行ける所に其人もとのごとく脊(セ)に
縋(スガリ)ありしく又一人の者ハ大綱(ツナ)を持て波の底へ鯨の腹(ハラ)を下へ通
旋出(メグリイデ)けれバ舟二艘に柱(ハシラ)を渡しおき鯨を繋(ツナギ)ぬ其舟ハ
引舟として渚(キシ)の方に近(チカヅ)く是を鯨突(ゲイトツ)といふ鯨更に死せずして
共倶(トモ)に鰭(ヒレ)をうごかして港(ミナタ)に到る沖にて死(シ)すれバ沈没(シヅミイリ)て渚(キシ)
によるゆゑの不能故に刺(ハサミ)ても括(クヽリ)をひきしめて劔(ヲ)を刺(ウツ)事

と止(トゾメ)む余(ヨ)江漢此浬にありて鯨漁(ゲイリヤウ)の趣(オモムキ)を見る刺(ハザシ)ニ勢子大将といふ水主者(カコノモノ)の働凄まじく戦国(センゴク)の人のごとし浪ハ鯨の血潮(チシホ)出て朱(シユ)の色となりて別大島の沖平戸の領島にて鯨の猟多き向海原(ウナバラ)ハ壱岐の国対馬遥(ハルカ)に朝鮮の大海より鯨ハ漸(ヤウヤク)初更(シヨカウ)ころ寄る鯨を取る所なり潮(ウシホ)に鯨の半(ナカバ)を隠(カクス)ありて全体(ゼンダイ)ハ見(ミエ)ず夜なとハきこへし望朝鮮まてと定む其時出て見るとなれハ潮(ウシホ)干(ヒ)て全体を満月(マンゲツ)の光まし見る大サ十間余(ケンヨ)の世美(セビ)鯨(クジラ)也世美ハ上品也鯨刺又ハ筋回りの時刻よりしてかくれぬる事此ときに両三度ありける船ハ全体をつかまへるもの稀(マレ)なり

奐[illegible](モリ)之圖　又ヨロヅトヱ

此製生鐵(ナマカネ)にて作(ツク)ル鯨に刺込(サシコミ)綱(ツナ)にて引(ヒク)なり

半(ナカバ)より曲(マガル)

四尺五寸

柄トモニ長サ九尺

同ハヤトヱ

此所(トコロ)のもの鯨をとらへ投刺(ナゲツク)具(グ)なり

劍(ケン)之圖

三尺餘

柄共ニ一丈三尺余

鯨を殺(コロス)具(グ)也

鯨を圍（カコム）圖

三崎鯨ヲ切解所ナリ
鯨二ツ連
吹潮勢
入勢
舟バタヲ扣テ鯨ヲ追フ
旗ヲ以テ鯨ノ方ヲ招

夜半出て
鯨乃背に
のぼる

鯨番人

鯨切解圖 此所ヲ三崎ト云

鯨大腸(チヤウ)を剪(キル)とき鑞(イシ)
又其卵の臭ふて見
小海老(アミ)といふ小魚を食ふ
又鯨(ケイ)鯢(ゲイ)といふ（ヲクジラ メクジラ）
万力車 捲イ(シヤチ) 七ヶ所ニ在
大綱をもて捲きる

ケイ島
見元
ライ鳥

肉納屋
腸納屋
骨納屋
〻〻〻

此島にて所漁の鯨凡五品あり

世美鯨　上品味美大なるものハ十間油弐百樽を出せり

長須鯨　中品味淡　物柔和にして頭ニ海上ニ浚テ入底ニ走ル

座頭鯨　中品世ノ剛にして又身やせ味同ニ長須ニ

児鯨　下品剛悍にして活溌にし舟を破る

鰯鯨　下品肉至て柔なり鯨の名にして此鰯をあさる

右各形異也予見所のものハ世美座頭の二品なり其余ハ不見

鯨のひげ
口中にあり
歯のごとし
別エラ
なり
剪切て
人夫ニ手渡スル
ベツタウト云者
人夫ヲ指図スル
ものなり

坐頭鯨
腹の方
ウネリ有
此ヘン
コブ〳〵
アリ
鰯鯨
世美

長須鯨

長須(ナガス) 坐頭(ザタウ) 腹子(ハラコ) 大サ九尺余
一名世美児鯨
腹子八寸より一尺五寸
總て鯨は卵(タマゴ)生(ランセウ)にあらず
はらこを生す故一疋なり
交(トジハル)る事も人のごとしと云

長須 腹方(ウラテ) 白し

児鯨 灰色にして連銭文アリ
口中歯アリ 其余歯なし
阿蘭陀書中にウニコルの説あり
夜國の産にして鯨魚のるいあり
毛色灰色にしてまだらの紋ありといふ
児鯨ハウニコルノ類ならんや
口のまはりに白き鬚あり

鮪見樓（シビミロウ）
鯨見
魚来る時
楼の上より見付る者
旗を出す 立檣の
舟其印を見て
口網を引 閉

鮪網
浮ウキ木
竹二本を

是ハ貝より生じたる
ものゝ干し肉を
いきりのまゝにして
うごく
此貝生じ
鯨乃腹の方
につく此貝
なき是
図のごとし
生臙脂肉色
貝の色
白し
生じ
鯨の鰭
皆肉にして
骨なし
切口
白
切口皆油肉

此鯯貝ハ世ら美鯨の頭又尾鰭につく
岩のセイと云ものにて貝なり海岸の石にもあり魚又これを喰ふ
此虫世美鯨にあり瀬貝の間ニ有り虱ト云
世ら鯨の鰭又尾のさきに付鯯貝なり
貝の色白足のごとき物と出る肉色にしてうす赤色なり

肉納屋之圖
役人

竈十八ニテ油ヲ
煎る
乾したる庫
の内に居す
鯨十間許の
もの油二百樽
を出す

骨納屋之図 又膓納屋あり
上腮の大骨
肋骨

骨を小く砕(クダキ)
油を煎ぜて

此魚アミナシといふ又カジキトヲシとも云

土佐の国にてはカジキ通しといふ
舟の底をつらぬく

尾より頭目の所まで一丈余有

此魚ハ生月嶋立石忠といへる者の家所に
漁しあるを写す正月の料理に用ゆるよし

脊の色
鮪に似
腹のカタ
白し

ライ鳥
頭ウス黄
觜生胭脂ウス色
タカミツノ歯　一名鯱
タカミツノ歯

此圖ハ此島山の漁父に畧すく圖し
海中に潮を吹ものを出れまれなり
つくろひしても全體を見え
世美鯨も同く潮を二筋に吹く
くじらも世美の外を一筋に吹くし

幼少より海辺に育り終に水をくゞることを得たるものなりければ
波濤のうちに巨魚にうちかゝりておもしろく放ちゆける者鮮し
よし虚誕なるもの盛ん三年ヶ鰭はなちて沓を剪りて油を
採出しなどとぞ以て余嘗平戸島に渡り松浦侯の命によりて
生月島益富又左衛門か宅にしばらく寓居十日 又左衛門は鯨を業とする所々島々に人を出網を五十年 二千余人をやしなふ
鯨の漁事あり あるじ存して甚だ好事らしき処に危
と思ひしが此漁をみたり 此島より壱岐へ十三里 西北にあたり 鯨剥云井 市を成しにぎはひのあり 正月
元日此島も門松として雑煮をいはふ事江戸に同じ
四日此島を出船しし平戸島の方白嶽の下を乗 絶壁数

文に縁(ヘリ)て赤壁(セキヘキ)の如し鯨(ウヲ)多く取る時ハ油水(アブラミツ)となるにより
岩壁(ガンヘキ)赤シ大赭石(タイシヤセキ)のあたり亘の色に見て所也(カナリ)此海岸を過りて田助港(タスケウラ)に至ル長崎より
乗舟此田助にかゝる　夫より舟を出して平戸城下に着(ツク)

鯨舟旗(ハタ)乃圖

長須(チガス)子持(コモチ)ハトモの方に建ル

勢美(セミ)のときハ此旗を舟の表に建ル坐頭(ザトウ)ハトモの方ニ多くしる
皆旗の建やうにて鯨の品を知るなり